

# 十訓抄

三

大政官文庫			
		一五	和
		一〇	書
一〇	一五	一六	門
冊	架	函	號

內閣文庫			
		二五	和
		一〇	書
一〇	一七	一六	類
函	架	冊	號

內閣文庫			
番號	和 11506		
冊數	10 ( 3 )		
函號	203	98	





神

第二 可羅橋慢事

神譜事

我人いづく人世あり皆橋慢と先  
 使ちるい少しわい自由の方と  
 と是我候分とけいひはしりし身そさく  
 中いあもくもはうらんど侍軍ともはる或い  
 偏執の方とわくも也是は我らひる業は  
 みどくまく人のつとを用さるありあはしい世  
 かはらぬまいあり思はむとそつと  
 中いそふせりまらぬなり或は打ふ  
 又鳴呼あり是はゆとくまれありて中い

神

神

神譜事







誦うたはざるはわれども富者とちうめ乃驕おごるざるはうたけきハ皆  
人の習なれども身の至いたく徳とくれゆらうたよつきて  
とよく志こころすまてをさやうあつらひをさた  
とど

① 列しつ子し傳でんくハ文ぶんよいく孔こう丘きゅうとハ人じん孫そん叔しやく敖あうノ諸しよ  
多おほいしく人ひとよ三さん悲ひなり是こゝろ瓜うり也なりや叔敖しやくあう云い何なにを  
云い答こたて云い爵しやく乃なり高たかし人をひと祈いのむ官くわん乃なり大おほなるは是  
とすい禄ろくわつとい是こゝろハ乃なりとつり

② 九く車しや敵てき右みぎ大おほ長ながと辞ことばハ乃なり何なにの表あらわれ文ぶん時ときハ書かき

家いへ好この儉けん素す不ふ業ぎやう龍りゆう洞どう之の慈じ禄ろく致ち陳ちん紅こう忍にん乖かい

孔こう丘きゅう之の識し

大おほく世よハある道のみちの如ごとくあるまゝいあつたるは落お氷ひやうと  
踏ふりしゆやうくけりき流ながハ竿さへさすりもたれ  
びきまもの也なり莊しやう子しハ乃なりこまよハ瓜うり伐きもあつ  
直ただちら瓜うりばきりてゆづらる瓜うりばきりて又また人の家いへノ  
中なかまよハ乃なり二ふたのりまよハ瓜うりををばいもて瓜うりを  
殺ころしハ明ある白しろ茅ちやう子し莊しやう子しハ乃なりてつと昨日きのうハ中なの  
木きハ直ただちら瓜うり伐きゆづらる瓜うりばきりて又また家のいへの二ふたのり  
ハよく瓜うりををいもてまざるを報うへハ吉きち本ほんもま  
とよく瓜うりざるも殺ころされぬとトつり莊しやう子しの世よ中な





乃そそめし一思はわりのくそまろくくはよはまてり  
 よく橋場けしきをばよそそ身とけくまじりやんそり  
 文集詩云

木一鷹一篇須記取 致身材ふ不材同  
 やわりの思ちりふ陸士衡が加文賦は

在木不材之質 處鷹之善鳴之分  
 もののふ者系あつちけ善哉が長句よし

昨日山中之本材取捨已今日庭前之花  
 詞慙於人

③ けしきのふれまろくくはよはまてり  
 浪乃



水に沈む世の政なきじうんといひて首陽の  
 入る人あり是諫じざるを以ていさめ退くべし  
 をみく退くる勢也其性寒氷より潔く懐寵  
 尸位の喻をさるれり  
孝廉論章云諫不細則奉  
 身以退有正之忠無阿順之  
 謂之尸位見可退而不退謂之懷寵  
 といふるふ橋倚車が詩

楚三閭醒終何益 周伯夷飢未必賢

いいてる公何よ志こつぬ振舞とくまらり  
 ずや賢才よあはれして若る人せり之ゆとりんや  
 う賢く恐れけしじぶものさやとてさうくた

あやかきみたりとぬらがりて也水形小砂がみて  
 を好む一内りてなされり青き色をびちりたり  
 糸記くつ小物よのこ室立帝妃也漢王固公の妻  
 といふ此れぞとるさばと書さめりうらとあは  
 衣は錦繡の敷をまぬ合はぬ温陸の好狐洞人  
 身よの蘭麝と煮ドクは和可き海にてうららの  
 男狐賤くのもかひぬ女津所よりあをうけり  
 やふ小十七と母狐共い十九とて女とくれは一  
 めくあめりつとたてて才をさねがてくハ單  
 狐無頼の独人よあくるそのひらさるりさうじ



青さ久月々に井さくくをれやちかちか  
もたれつてなげけりききいさうさくの  
家の中づれて月のいろしむくすこをい  
違のいづろふ志ぎりりひきまて成  
帝あう三河揚してくさうさういさ  
佳あまの身をほまれ秘伝終て流  
まどもろく決牙みせらぶれゆき  
らもぞはすくさる情田のさう  
事サササササササササ

④ 木集一考の凶宅のついでに驕ハ物乃盈る也老ハ

殺の終るよりいさういさう同四考  
奈わりの美さる事今在目し書り  
吳王夫差乃姑蘓臺素始自皇帝  
をまいりりりりりりりりりり  
て子孫つてさる事ありりりり  
了書る事ありりりりりりりり  
彈兵滅う有荆棘姑蘓臺之露  
暴秦表方無虎狼感陽宮之煙  
中いり唐を宗法附魏徵德政と  
る詞り



焚鹿臺之室衣毀阿房之廣殿懼危亡於  
峻宇思安處於卑宮則神化潛通無為而  
治德於上也

此のわらうる瓜貞觀改要に書れりるこそ倭俗の政  
有べきやうのみどくやでぬれ此の帝道乃一東  
也阿房殿人振舞ふるゆで此の瓜とてとる  
度臺阿房殿紂秦皇二世未の宮室より五千の  
上擗ハ佛とて何ともしよば釋尊乃は業と  
從多い内府瓜とて退りりる衆根深重れ  
増上擗かていま證せざる瓜陀とてやい未

得瓜はりりやあいののく失あるものが也安んは  
うの経は從りり不擗は丘いあつらものあふ我深教  
汝多不教收擗と唱く柱本瓦石をよと忍罵言  
放言瓜とてやうて終る其證を得多いされの後  
世菩提のよめりりあつらるる瓜陀とてやい未

瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未  
瓜陀とてやい未



第三 不悔人倫事

或人云人をあはげう事へをうられむと申す事也  
 わづいへ貪して賤をも悔らむといふ事也又  
 悔らむる事と侮らむる事と云ふ事也  
 さづらうにせと申す事なりわづいへはけり事  
 あるづらう事と云ふ事なりものをばあむ事なりよ  
 らぬやう事なりといふ事なり其の擧げ事なりと云ふ  
 事なり此の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 ていふ事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 など其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

辱が悔しき事にはわいさる事なり其の事なり其の事なり

これれむ事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 ちり孤兒寡婦ありともあむ事なり其の事なり其の事なり  
 文の事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

⑤和泉武部保男が妻として丹後みくらをうくる事

あり奇合ありともふ小武部内侍あり事なり其の事なり  
 事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 内侍つらひみあり事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 あり事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり  
 けれ事なり其の事なり其の事なり其の事なり其の事なり





物くまづる小直衣の神祇らうく

大いひくねるのきをたれいゆこみかえはわよれ格え  
 やよらんもくまづるおのづまわさゆくここのいふうら  
 ちやいおやぐらうのいして返寄はも及びど神祇いこ  
 とねらておげくまづる小式部をれより奇くまんの母  
 おおぐえおまのくらひ思いうらほくをて櫻運は事  
 むれど被郷のゆはなれたの奇きを今後か  
 とぐくまはまづ結ざりけるや

⑥ 進房やりのりいざれ御人として内裡よりい  
 わりまゝる孤さる情をなれば女房達あはばりて







さうあかしの事チケリシテハシメテおをさへまじりや藤よ  
いぢれ物といつら思女士がまじりしひよとたぐりケリ  
ハ依見修理方丈後修のあてて今と水上月とまじり  
をよめく藤より河は田舎よりよめりおま中門の  
かよりめてまじりが青侍よりよめて今夜の夜とあて  
仕りていへといひゆきづ興をまじりつらといひ  
水やまじり水もまじりおすかといてすまじりおのよか  
侍もまじり由縁人といひまじりつらいなりて藤よりしてまじ  
あつらまじり

同人播磨へさぐりケリが高砂あて各奇よむ大富

先生義定といふもの奇に

我のいぢれ物といひておのあの人おねいゆいさうケリ  
人々感じあつら良蓮うのあよめりて妻牛に腹つ  
り続あつらつらおとといひケリ  
丸 或る女房あまこめて筆のくはまららのけり  
こと共よめりおまらるる男もあけまじりとのあ人つ  
まじりよめりて彼希教の中に相の本に候一是  
かまじりまじりてあま細いをまじりつらやうつらまじり  
あままじりてあままじりつらまじりてあままじりつら  
あままじりてあままじりつらまじりつらまじりつら











郷の娘とてつみき奇よんちをけらぐらうく  
 をやうしきりくふとぞ

⑬ 指編訓性壬季親といふもの奇きり周易性壬  
 して其道世にゆがえ奇きれど日月の方をさる  
 閑えをりりたり或文亭の機白の府よりさる  
 けらぬ沈淪をさるる孤其巾に家との儒者あり  
 くらぐは是孤あをさるるけらるや閉口後未客と  
 上白とつひよりさるる季親合陰先達儒とどつき  
 さるるくらめりてつみき奇よんちをけらぐらうく

⑭ 鳥羽院法河相撰節の後中納言長實の





のく経路持守存遠とく相撲息男存成と具  
して来りりるる方へ先へ入る酒をどすりりり  
弘光とく相撲又本同来りりく孟抄をどくく及  
向弘光酒相の河弘光とわまりにきりりりりり  
戸辺代れ相撲の勢どくく成りもどくくたぢぢぢ  
もどく弘光りりりりりりりりりりりりりりり  
雌雄を交して勢どくく成りもどくくたぢぢぢ  
とくけりりりりりりりりりりりりりりりりり  
人これとゆりりりりりりりりりりりりりりり  
や戸存遠がー居りりりりりりりりりりりりりり

本弘戸存成不肖の身今なごぞ小幸ふれ脇と  
ゆりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
とく弘光とく相撲戸げりりりりりりりりりりり  
たぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
思ひりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
戸りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
かぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
わんんと身をどくくどくくどくくどくくどくく  
きりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

11

11











貞盛子 公雅子  
 維衛 致頼として世は揚まてり四人は武才也亦虎をく  
 りてたのよとにたきだてりては保男くれが振舞  
 をんかしくふわおつては師考かいてあてまわ也  
 くりのひまきふるも也弘定よ似ざりたり  
 ⑤ 昔漢高祖と楚項羽と秦の世はわくそいふ  
 わまこの合戦とてさすやいふははぐあてつめよ  
 項羽とあつて天下とてわたりてふ黠布と云  
 小長けをよそひて事有るはあはげりてさう  
 であまふたふたがれ夫かあてりて失多のよう何  
 方につもそい人をばあおげりゆげさありすて賢

人も万慮よ一失わり愚あつても千慮よ一徳有  
 此千ぐつれ徳弘習て彼万ぐ一乃失弘のさるべ  
 くれよつて智者の空門を破ると聖人菊菫よ  
 いろとつて此さるい昔人の人を傍らてあや  
 貴ものおり物弘回まぶるて弘死りてあやなり  
 黄帝の牧童の飼とて徳宗の農夫のいそあをぞ  
 入絡るる街談巷説のあつてもわくどとらさる  
 あつてつり  
 ⑥ 村上天皇いそりて中さほるされ人れ事むと先  
 て延表の先帝とあ世のつるあつりあつて問を

111  
 112



結ひなればおそれねがえけりや  
 らばとつみやく畏るるけし  
 清くごのありせりんや  
 けらあさひりつどゆるふ  
 績板のいさく入場る  
 けまばつみやく清感あり  
 てよくおがき先へ定りし  
 十六 清堂園白物  
 立くる小童のりた文をさげく



三十一

三十一



ゆかりてらうくきりよせてゆんぐりれば眼より守時育  
多うりくく賢と相のちうりくれむかてりてま湯よ  
はきてそま文とせまゆられかろをふ後よい本は時標  
とて廣才博覧乃文士ありけきば君よりはて特士  
乃道をはきり養生け方をえんはくも多考考の  
人より赤

丸書無相室と人生身の善賢と見ても久しよ  
寤寐より清くしむるふ或夜精経うけられ多経  
をみぶりかぐろ腸息よよるとりて志ばしきとん  
くろ爰よま身の善賢と見えんと心で神修也

女の長者伝るるるよ由して爰さらぬ奇異のさしそ  
かしてかゝるゆひりしそ長老が家よゆいしつとされい  
と今ふふりよ旨の筆とをねま礼舞れ程也長老  
よこ度よ長く靴とわく礼拂子の法身とくろろの  
詞しひそ

用防じらほはれ中かろみさう井も風いふふねとも  
けらばちうとよ人用始して位作恭敬してよこ  
めりつらつとゆりりわさむふけりたふらま地  
善賢茶の形よ祝ト六牙れ白象みよあて眉間乃  
ひろり伝るるらて道俗を儀男女とてしは即微妙



の音聲をきいて実相を漏のち海へ五葉六葉の  
風いふるのども随縁をみれば法乃ちあゆむと感  
涙かきんかきて眼をひらけてみれば又そのあま  
女人乃ちまごごとと誠之因縁ひらきその須弥山と眼  
をさぐるるとたひ又芥のこらりと現れて法門を演  
まよかくむむと度く教れしてなしく帰くあま  
長者あまの府城を因道よりよ人の行へまを  
けりしにゆめ不可及とつして即俄く死と異香  
をよみらしてふれと香し長者の形滅乃ち同相宴の  
奥とありて悪法とる事うらやましく人ゆとく悪

漏りゆがれて帰路はゆがひたりとさそ彼長者女人  
好色のそとひさればあれう思瓜持者の化作といふと  
佛養れ悲観を生化度の方使みよとてくらとさほ  
くにかそてあまの法入道までと賤よのうらぶらま  
りやのまらひにてあまの世を人のま智のうら  
はえりしてまらさしそと惠心檀那の傍にをどおし  
ゆして信果乃信覺の佛ありいふるかときりたる瓜  
到ふといふまらさしそと益ありといふれ  
たれば法門を演じてこそと惠眼の開く事とて結  
るるの田舎よといふとそと香けり也といふたれは



とくろのけいん 普賢のせうてん 解脫せしめ給  
ふりと苦肉惠心 敬致乃せしむ ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん  
み此をみせし せしめし せしめし せしめし せしめし

身色如金山 端嚴甚微妙 如淨瑠璃中内現  
真金像

と佛陀を誦して せしめし せしめし せしめし せしめし  
鳥の里よしもん 弘法大師の像 後醍醐天皇 京都  
まうり 皆是是意 鄙の民間とて せしめし せしめし せしめし  
く 稽古れん 弘法わん せしめし せしめし せしめし せしめし  
圓縁之子也 粟田大花の世 守守報が息して

二人あづき 其子 婿し けしめし 才徳と 賞と せしめし せしめし  
大花のやびごれと 官ふる せしめし 後漢書云

却廣累世之農夫也 伯始致位公相  
黃憲牛醫之賤子也 叔度勳名京師

志のしん 伝説が 殷宗乃 夏中 志速 民  
をりて 舟と 品尚が 周文 東の 右ふ 宗一 即  
世公 治ふ 器と せしめし 賤を せしめし せしめし せしめし  
も 誤く 補 仿し 賢才 せしめし せしめし せしめし せしめし  
一 孝虎 帝製云

殷帝詔 嚴郊野月 周文禮厚 渭陽風



所貴見賢才といつては故彼二人よやく作らるる  
つらかり厚稜の雷澤の漢又かりされば後帝  
位一のかり審威の牛口れ足者まがら終る國政に  
む 天子より顔固がら中身よ非なりといふ  
賢愚とまらぬ人より旁人をまらぬめをい  
きてあつたを愛せんといふとやえりといふと  
よらざらぬといふとあるとといふづらばはて  
あつて又其人よわらぬといふ其官よ非る是を小人  
といふ小人の官あつたといふは是を小人  
いふは世情の人のかりといふ是を及ぶといふ

よは氏を継ぐといふ人の年のつらきなりといふは  
才のあつたといふは又道徳あつた君の道徳  
あつた小人の才といふは無國のまらぬといふ  
あつたは此の故をたれといふは無でをを智者を  
まらぬといふは一節の作らぬといふはたまはる  
あつたは故の故といふは又人倫のまらぬといふは  
祇をわらぬといふは又漢家の國王帝徳といふ  
といふは伴はるといふは又我朝の運た  
天の鉄をまらぬといふは又庶人の身よわらぬ  
をや







